
戻り橋の暴君

ヨッシーと愉快的仲間たち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戻り橋の暴君

【Nコード】

N8704M

【作者名】

ヨッシーと愉快的仲間たち

【あらすじ】

京都の一条戻り橋

昔は鬼が住んでいたが、今は違う。

そこには個性的な人物たち（？）がそこに住み着いていた。

（注）まともな人間が一人もいません

「だって……お化け怖いんだもん」

まずはここの説明だな

一条戻り橋、それは全国的にも有名な京都の橋の一つだ。

遙か昔の平安時代、この橋は鬼が住み着いていた。

それ故にこの橋は、あの世の入り口とも云われていた……のは有名な話だ。

勿論、「鬼が本当にいたのか？」と聞かれれば「知らん」と答えるしかない。

まあこんな馬鹿な質問する阿呆はお前くらいだろうが。

何にせよ、今の戻り橋には鬼は住んでいないのだけは確かだ。

そう、今この橋に住んでいる私が言うのだから間違いない……

と言っても私がこの橋に住み着いたのは一週間ほど前なのだがな。

なぜこの橋に住むようになったかつて？

そうだな …… 少しだけ、昔話をしようか

ちょうどバブル崩壊時期だ。

街には失業者が溢れかえり、人間社会全体が嫌な雰囲気だった。

私には、関係ない話だったがな……

その頃の私は手が着けられなかった。

年上の者には喧嘩をふっかけ、連戦連勝 常勝無敗

またあるときは万引きをしたり、勝手に人のものを盗んだり、他にも色々とやらかしていた。

さすがに警察や両親も黙ってはいなかった。

両親からは家を追い出された。

話が変わるが実はこの両親、本当の親じゃなかった。

私は捨て子だった。

偶然、この両親がまだ幼い私を見つけ、そのまま育ててくれた。

……少しそれだな、話を戻そう。

取りあえず、こんな事ばかりしていたんだ。

警察からは追われるはめになった。

私は必死に逃げたよ

……そして毎日が、戦いだった。

その日の飯も困っていたからな、だが俺には誰にも負けない腕っ節があつたからなんとか生きていけた。

この後も、色々とあるがそれは次の機会にしよう。

「あれ見てよ！」

学校帰りの金髪的女子高生が隣の茶髪的女子高生に話しかけている。

「うわっ！ 汚ない猫」 茶髪は嫌悪感丸出しの声を上げた。

「そつちじゃないよ！ その隣にいる女！」

金髪は少し声を荒げていった。

「はあ？ 女なんていいひんやん」

「なにいつてんのよ。そこに……あれ？ いない……」
金髪は、おかしいな、と呟きながら橋を見つめていた。

どんなに見つめても、橋の手すりの上に、
汚い黒猫がふてぶてしく鎮座しているだけだった。

「幽霊でもみたんちゃうん？」
茶髪はふざけながら言った。

「まさかー それはないっしょ だって真っ昼間だよ」

真っ昼間だからというよく分からない根拠で、それを否定した

「まっ そんなんより田中の奴がさー由衣に、告ったらしいでー」

茶髪は話題を百八十度回転させた。

「え、マジー？」

金髪はその話題に食いついた。

茶髪はニヤリと口元を歪めながら

「うん、マジ」

といった。

「それで… どうなったわけ？」

金髪は興味津々だった。

「この先は、有料です

百円を入れてください」

そう言いながら茶髪は財布を鞆から取り出し
小銭入れを開いた。

「さらば！百円」

金髪は躊躇せず小銭入れに百円を入れた。

「毎度ありー なら立ち話もなんだからマックいこつや 奢るで百
円までなら」

「それ、私の金じゃん」

こな、

会話をしながら金髪と茶髪はサツサとその場を去っていった。

「へー 猫さんも大変だったんですねー」

私が生きていた頃ならきつと考えもしなかっただろう。

（いやー、猫の世界も大変だ）

「あの頃は、若かったんだよ……あと猫さんっていうな阿呆」
猫さんは遠い目をしながら私にいった。

「なら、なんて呼べばいいんです？ あと、私は阿呆じゃなくて
七海ですよー」

一応、阿呆は否定しておく

（うん、少なくとも阿呆なんて呼ばれたことないし…阿呆な子と
は親にいわれてたけど）

「阿呆に名乗る名などない」

「ひ…ひどい」（猫さん、それはひどいですよ）

「仲良くしましょうよー 猫さん」 私は猫さんの頭を撫でた。
どうやら触ろうと思えば触れるらしい。

「触るな このド阿呆 今日のもう疲れた。私は寝る」

猫さんは橋の名前が彫られている石像の上で丸くなりだした。

カラスの鳴き声が、静かに響いている。

辺りは、段々と茜色に染まり、人の気配はすくなくなっていた。

猫さんは、さも鬱陶しそうな顔をしながら、

手すりをつたって、

橋の名前が彫られている

石像の上で丸くなりだした。

辺りは、すっかり暗闇に染まり、人の気配は微塵も感じない。

夕日が猫さんの体に当たる。その姿はどうか哀愁を漂わせていた。

「猫さん、寝ないで下さいよ。」

寂しいじゃないですか それにまだ夕方ですよ」

私はなんとか猫さんを起こそうとした。

「うるさい、大人しくしないで追い出すぞ」

（今、寝られたら私…暇で死んじゃう）

「だって……お化け怖いんだもん」
私はなんとか猫さんの気を引こうと、
おかしいことを口走っていた。

（お化けが苦手なのは、本当だしね…私、幽霊だけど）

「幽霊がなにいつてんだ。いいから寝かしてくれ」

ごもつともな正論が帰ってきた。

それっきり猫さんは何を言っても反応しなかった。

カラスの鳴き声が

「阿呆ー」といつている様に聞こえてきた。

私は戦場で一人取り残された気分だった。

「はあー」

大きなため息をつきながら、
私は自分が死んだときのことをふりかえった。

あなたは遠くに飛んでいった……（前書き）

どうも初めまして！

この度、生まれて初めての小説挑戦というわけです。

まだまだ下手くそですが温かい目でみてやってください！

m (| |) m

改善点や感想なんかもらえると有り難いです。

あなたは遠くに飛んでいった……

一週間くらい前

その日は突然、雨が降ってきた。

私は、バイトを終え、家に帰ろうとしていたが生憎、傘を持っていなかったので雨宿りを余儀無くされていた。

因みにその日は携帯も財布も家にわすれていた。

……ついてないなあ

そう、思いながら空模様をうかがっていた。

空は親に怒られ大泣きしている子どものように泣き止む気配はなかった。

……どうしよう、家までそんなに遠くないけど濡れるのは、嫌だしなー

そんな時に突然誰かに見られているような気配がした。

私は、さりげなく辺りを見回したが、それらしい人はなかった。

……気のせいかな？

隣で物音がした。

とっさに音のした方向を見ると、そこには一本の赤い傘が置いてあった。

……あれ、こんなところに傘、あったっけ？……まあ、いいや借り

ちやお

いまだによく分からない、なんでこの傘を勝手に使おうとしたのか、

だがその時の私はただラッキーと思い、その傘を差し、家に向かった。

家に帰るには川沿いを通らなくてはいけなく、左手には大きな川があり、右手には大きなグラウンドがある。

そのグラウンドで、中学生くらいの男の子達が雨の中、野球をして遊んでいた。

……元気だなー、若いっていいなー

自分も、五年程前は同じ位の年齢だったのに……と思いながら、少年達を見ていた。

すると、突然の突風が襲ってきた。

私はとっさに目を瞑った。と、同時に体全体に雨があたった。

慌て傘を見ると、持ち手の部分だけを残して飛んでいってしまっていた。

……なんでやねん！

なぜか関西弁でツツコミをいれていた。

少年の一人が大ホームランを打った。

「あ、危ない」

子ども達の声が聞こえてくる。

私は傘に気を取られ、反応が遅れた。
そして、頭に強い衝撃が襲ってきた。

……え、なにが起こったの？

体のバランスが崩れ私は川に落ちてしまい

そこで意識が途切れていった。……

プラス思考

気がついたら、私はこの橋にいた。

太陽の光がガラガラと輝いて、目が痛い。

風は優しく私の肌を包み、辺りは川の匂いがし、遠くでは車の通る音が聞こえている。

……頭が痛い、なにがあっただっけ？

朦朧とする頭をフル回転させ、思いだそうとした。

……そうだ、確かボールが頭にぶつかってそれで？ よく思い出せない

だんだんと冷静になってみると自分の体がずぶ濡れなのに気づいた。

可笑しなことに、まったく、冷たくはなかった。

……そうだ！ 私、川に落ちたんだ

その後のことは思い出せなかった。

……取りあえず、ここがどこだか誰かに聞いてみよう

目の前に三十代ほどの男がタバコを吸いながら橋の下に流れる川を見つめていた。

……見た目的に優しそうだし、この人に聞こう

「すみません……少しいいですか」私は少し、遠慮がちに聞いてみた。

しかし、男はなんの反応もしめさなかった。

……聞こえてないのかな？

「すみませーん」

今度は、さつきより大きな声で尋ねてみた。

「……」

それでも、男は無言だった。

……もしかして、無視されてる？ まさかね……うん、きっとシャイなんだよ

なんとも阿呆な思考回路をしていると思う。

私は男の耳元で声を上げた。だが、男は全くの無反応
その後も、なんとか相手にしてもらおうと努力してみたが、男はやはり無反応だった。

「なんなのよ！　さんざん無視してくれちゃって」

私は腹が立ち、男に罵声を浴びせた。

男は、欠伸をしながら何事もなかったかのように、その場を去っていった。

「阿呆ー！　ボケー！　ケチ！　ばーか！」

去っていった、男の背に向けチンケな台詞を叫んだ

私の声は、虚しく響いていた。

周りの木々が風に揺れざわめいている。

……おかしい、いくらなんでも　これだけ叫んでたら、なにか反応をしめしてもいいのに

その、瞬間に気づいた。

雨が降っているわけでもないのに、こんなずぶ濡れの女がいたらいくらなんでも、声くらいかけるだろう。

ましてやこんな大声でさけんでいるのに、誰も反応をしめさないのはおかしい。

というより、気がついたら知らないところにいる時点でおかしいのだが

「いったい、どういうことなの？」

頭がさつきより混乱してきた。

「おい、そこのお前」

……だめだ、なにも考えられないよ

「おい、聞こえてるのか？」

……落ち着こう、冷静に考えるのよ 松本 七海
十九歳

「おい？」

……そうだ、川の流れでも見たら落ち着くかも

そうおもい、手すりに手をかけ、川を覗き込んだ。川は日の光が反射して、神秘的だった。

「この私を無視するとはいい度胸だな」

次の瞬間、右手に激痛が走った。

「イッターい！」

あまりの痛さに絶叫して手すりを離れた。

右手を見ると生々しいひっかき傷ができていた。

「なにすんのよ！」

「私を無視するからだ」

私は声の主を目にした。私の右手側に一匹の汚い黒猫がいた。手すりの上で鎮座している。

「はっ？」

わたしの思考は停止した。

「はっ？……じゃないこの阿呆」

猫は手すりの上で、立ち上がった。

次の瞬間、「なんじゃこりゃー！」と、さっきの倍以上に絶叫していた。

「うるさい！ 静かにしろ」

……落ち着け、落ち着くんだ 松本 七海 十九歳

私は、ゆっくり深呼吸をした。

「まったく…少しは落ち着いたか？」

猫はそう、私に囁いた。

……落ち着くわけがないでしょ！

と今にも口に出しそうになったが、それを我慢して飲み込んだ。

「あのいくつか聞いてもいいですか？」

なぜか遠慮がちに聞いてしまった。

「ああ、いいぞ」

「じゃあ、まず猫ですよね？」

「見れば、分かるだろ」

……ですよー

「猫って普通、喋りましたっけ？」

「私は、特別だ」

……ああ、そうですか

「他に、質問は？」

猫が私を急かした。

「えーっと」……どうしよう 聞きたいことが多すぎる

「聞きたいことが沢山あるようだから、まず私の用を先にすましてもいいか？」

猫は橋の手すりの上で丸くなりながら呟いた。

「あつ、はいどうぞ」

……今、思ったけど、偉そうな猫

「そうか、ならまず

お前……自分が死んでるのに気づいているか？」

猫の目が少したけ、きらついた

……は？

私は固まってしまった。

「時々いるんだよ、お前みたいに死んでるのに気づかないで、さまよってるやつがさ」

……え？

「自分が死んでることを自覚してないでさまよい続けると悪霊になるんだ。幽霊ってやつは」

……幽霊？ 私が？

「自覚したなら、いいんだ。悪霊になられると周りに悪影響を与えるからな」……マジで？

「これで、私の要件は終わりだ。辛いだろうが、これも運命と思って諦める」

猫は気まずそうに自分の首をかいていた。

少しの静寂が訪れ、そして

「スッゴいー！」

今日、一番の絶叫が響いた。

猫は目を丸くしていた。

「通りで、さっきから無視されてると思ったよー」

「お前……辛くないのか？」

「なにを言っているんですか猫さん 確かに辛いですが、これは逆に好機です」

猫さんは目をキョトンとしていた。

「これで、堂々と可愛い女の子にイタズラし放題です。
いやー、神様に感謝ですよ」 猫さんは口をあんぐりさせていた。

「これは……とんでもない阿呆に声をかけてしまった」 自分の罪を懺悔するような言い方だった。

まだまだ夜は明ける気配はない。

少しだけ肌寒い

あの後、色々な話を猫さんとした。

川に落ちてから数時間しかたっていないと思っていたら、長い時間たっていた事にも気づいた。

……流石に眠くなってきたなあ あっ！ まだ猫さんの名前聞いてないや…まあ、いいや朝になったらちゃんと聞こ

だんだんと目蓋が重くなってきた。

……幽霊でも眠くなるんだ どうしようかな明日から…

そんなことを考えながら目蓋を閉じた。

……可愛い女の子でも探しにいこーっと

そこで、私の意識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8704m/>

戻り橋の暴君

2010年10月9日21時54分発行